

## ユダヤ人ばかりでなく 異邦人の救いへ

使徒言行録10章9～23節

2022年6月19日

松田 基子 師

イエス様は、十字架に架かり、人類の罪を贖い、復活して救いの業を完成されると、ご自身による救いを、弟子達に託して、天、即ち永遠の世界に帰られ、神様の右の座に着かれました。その後、聖霊は約束の通り、イエス様と入れ替わりに、心をつにして、祈り、待ち望む、弟子達の群れの中に降って来られました。

聖霊は弟子達に、イエス様こそ、神様が約束し、遣わされたメシア、救い主である事を語り出す勇氣と言葉を与えて彼らを押し出されました。

ところで、イエス様は弟子達に、

ルカ福音書24章47節で、

「罪の赦しを得させる悔い改めが、  
その名によってあらゆる国の人々に  
宣べ伝えられる」

と言われ、また、

マルコ福音書の、16章15節では、

「全世界に行って、すべての造られた  
ものに福音を宣べ伝えなさい」

と命じられました。

イエス・キリストの福音が、全世界に宣べ伝えられることこそ、神様の御計画でした。しかし、弟子達は、ペンテコステ以来、聖霊によって力強い福音宣教者に変えられたのですが、彼らはこの福音を伝えるのに、まだ、同胞ユダヤ人だけに語っていました。イエス様は弟子達に、

『あらゆる国の人々に、全世界に行くように』  
と命じられましたが、弟子達には、

『異邦人に向かって積極的に踏み出せない  
理由』

がありました。申命記7章3節、4節には、次の様な律法の命令がありました。祖先達がカナンに定住するに当たってモーセは、

「先住民と縁組みをし、あなたの娘をその  
息子に嫁がせたり、娘をあなたの息子の  
嫁に迎えたりしてはならない」

「あなたの息子を引き離して、わたしに背かせ、  
彼らは遂に、他の神々に仕えるようになり、

主の怒りがあなた達に対して燃え、主は  
あなたを速やかに滅ぼされるからである」  
と命じました。

その後の歴史を辿ると、ユダヤ人は捕囚から帰って来て、苦労に苦労を重ねて、第二神殿を建てましたが、完成しますと、祭司エズラは、バビロンから持って来た、モーセの律法書を公布しました。民衆は神の民として、律法を守る事を誓約しました。しかし、そこでの大きな問題は、民衆の中に、異民族と結婚した人々がいた事です。エズラにとって、神様の民に選ばれたイスラエルは、

『血筋を守って行く責任がある』

と考えていました。そのため

『異民族との結婚は、律法に違反した行為  
だ』と受け取ったのです。

エズラ記10章1節に、

「エズラは神殿の前で祈り、涙ながらに  
罪を告白し、身を伏せていた」

とあります。そのエズラに対してシェカンヤは、  
「わたしたちは神に背き、この地の民の中から、  
異民族の嫁を迎え入れました。しかしながら、  
今でもイスラエルには希望があります。今、  
わたしの主の勧めと、神の御命令を恐れ敬う  
方々の勧めに従ってわたしたちは神と契約を  
結び、その嫁と嫁の生んだ子をすべて離縁  
いたします。律法に従って行われますように」

と言って実行したのです。

今日の私達の考えからは受け入れられない、  
人権無視な事が行われたのです。ただ、それは  
女性や子供の人権は認められていなかった時代で、  
紀元前515年に第二神殿が完成して後のこと  
でした。イスラエルはこの様な考えから、異邦  
人との接触を汚れると考えて避けました。しか  
し、律法はそう言うものではないのです。律法  
は神の民として、その時代の生活の仕方が示  
されたものです。それは出発的なものであり、  
人権意識の成長と共に、改正の道が拓かれて  
いるものであり、ましてや、救い的手段では  
ありません。

イエス様によって、律法は完成しました。つまり、イエス様は、全ての律法を守られ、更に神様の御心に適った究極の律法をお与えになりました。

それはマタイ福音書の22章37節から、  
『心を尽くし精神を尽くし、思いを尽くして、  
あなたの神である主を愛しなさい』  
これが最も重要な第一の掟である。  
第二も、これと同じように重要である。  
『隣人を自分ように愛しなさい』  
律法全体と預言者は、この二つの掟に  
基づいている』

と教えられました。

イエス様はその生き方を貫かれ、徴税人や遊女、律法を守れないユダヤ教社会から罪人と称された人々、重い皮膚病を患っている病人など、律法社会から汚れた者として排除された人々に『彼らも等しく、神様から愛されている存在であることを語り聞かせられたばかりではなく、愛を注いで、彼らの友となり、病を癒されました。』

イエス様のそういう言動は、長い律法社会の伝統を守り、その道こそ、神様が求めておられる道だと思込んでいる者達にとっては、

『神様の教えに逆らう、社会を乱す、  
自分達の地位を脅かす、危険人物』

に映りました。

その結果、彼らはイエス様を十字架に架けたのでした。弟子達は、そのイエス様の教えを聞き、その愛を目の当たりにしてきたのですが、彼らの心に染みついた律法に対する考えはなかなか取り去られませんでした。ユダヤ人の体には、生まれ乍らに、律法が染みこんでいました。異教の神々を礼拝して居る異邦人に接する事は、宗教的に汚れると言う感覚が染みついていた。弟子達にしても、イエス様の生き方に接し、人の尊さを考える事が出来、イエス様の命令を覚えていたはずなのですが、なかなか先に進むことが出来ないでいました。

一方神様は、異邦人へ救いが広がって行くことを求めておられました。神様の目に先ず留

まったのは、イスラエルの領内にいる異邦人です。イスラエルにとって、一番身近な異邦人は、領内を監視するローマ兵です。地中海に面した港湾都市カイサリアは、既にヘロデ大王によって、その名も、ローマ帝国初代皇帝の名を冠した、それに相応しい劇場、円形演劇場、競技場、水道、皇帝礼拝の大神殿などを備えた、ローマ風の大都市でした。ローマ帝国は紀元6年、ローマへの反抗分子の鎮圧と、領主アルケラオの悪政から、カイサリアを含む地域を、ユダヤ属州にして、ローマ直轄領にしました。

そしてここに、ローマ総督と軍隊を常駐させ、駐屯地としました。カイサリアは、イスラエルで最も近代的で、異邦人が住んでいる町でした。神様はそこに住むローマ軍の、一人の100人隊長に目を留めておられました。彼の名は、コルネリウスです。彼はローマ人でありながら、ユダヤ属州に来て、ユダヤ人が礼拝する主なる神様は、ギリシャの神々とは全く違った、人を超えた天地万物を創造された唯一の神様である事を知り、信じました。ユダヤ教に改宗するまでには至っていませんでしたが、10章2節を見ますと、

「信仰心あつく、一家そろって神を畏れ、民に多くの施しをし、絶えず神に祈っていた」とあります。

彼は一般のユダヤ人以上に、神様に対して真実に生きて、ユダヤの貧しい人々への施しにも励んでいた人でした。それは周りのユダヤ人も認めるところでしたが、何よりも、神様が認めておられました。或る日、コルネリウスは、いつもものように午後3時の祈りをしていると、彼はそこで幻を見ました。輝く服を着た天使を見て畏れ、  
「主よ、何でしょうか」

と尋ねると、天使は

「あなたの祈りと施しは、神の前に届き、覚えられた。いま、ヤツファへ人を送って、ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。その人は革鞣し職人シモンと言う人の客となっている。シモンの家は海岸にある」

と告げました。

革鞣しと言うのは、動物の革を柔らかくして製

品に造れるようにする作業ですが、ユダヤ人達からは、敬遠された職業であった為に、町から離れた海辺に家を持っていたとされています。ペトロはイエス様によって、職業による身分の差別感を超えて、彼との信仰の交流を持っていましたが、ペトロにはもう一つ超えるべき壁がありました。一方コルネリウスは、天使の指示に従いすぐに行動しました。二人の召使いと側近の部下で、信仰心の篤い一人の兵士を呼び、全ての事を話して、ヤッファに向けて送りだしました。

側近の部下に、同じ信仰を持つ信仰心の篤い部下がいたと言うことから、コルネリウスが如何に主なる神様に、真実に仕えていたかと言うことが分かります。部下にまで感化を与えていたのです。神様が見込まれない筈がありません。カイサリアからヤッファまでは、二日路、五十数キロ離れていました。神様は次に、ペトロに働き懸けられました。9節を見ますと、

「翌日、この三人が旅をしてヤッファの町に近づいたころ、ペトロは祈るため屋上に上がった。昼の十二時ごろである。彼は空腹を覚え、何か食べたいと思った。人々が食事の準備をしている内に、ペトロは我を忘れたようになり、天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に降りて来るのを見た。その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。そして、

『ペトロよ、身を起こして、  
屠って食べなさい』

と言う声がした」

とあります。

ペトロは一日三回の祈りの時間に合わせて、12時頃、祈るために屋上に上がりました。彼は空腹でした。食べ物を欲していましたが、その儘、祈りに没頭したようです。そこで彼は幻を見たのです。そこには、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が現れました。何と天からの声は、

「屠って食べなさい」

との命令です。ペトロは全身に拒否反応が走りました。レビ記11章や、申命記14章には、清

い動物と汚れた動物が分けられています。

レビ記11章44節には、食べて良い生き物と食べてはならない生き物とを区別した後で、

「わたしはあなたたちの神、主である。あなた達は自分自身を聖別して、聖なる者となれ。わたしが聖なるものだからである。地上を這う、爬虫類によって自分を汚してはならない」と命じられています。

ペトロは小さい時から、その律法を守って来ましたが、

「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことがありません」

と優等生の答えをしました。すると天からの声は、

「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない」

と言われました。こう言うことが三度繰り返されたという事は、神様の確かな御心が伝えられたということです。元々食物規定が定められたのは、異民族、異教社会との生き方を、はっきり区別させる為でした。神様はペトロに、この幻を通して、何か大切な事を教えようとしておられました。ペトロが思案に暮れていると、階下では、コルネリウスからの使いが、シモンの家を探し当てて、ペトロがいるかどうか、尋ねていました。

すると霊は、ペトロを促し、

「三人の者があなたを捜しに来ている。

立って下に行き、ためらわないで一緒に

出発しなさい。私があの方をよこしたのだ」

との御声が聞こえました。ペトロは降りて行って、彼らから要件を聞きました。使いの者達は、ローマ人である百人隊長、コルネリウスの信仰と、ユダヤ人に評判が良いこと、その彼に、ペトロを招いて話しを聞くようにと、聖なる天使からお告げがあった事を伝えました。ペトロは彼らの話を聞いて直ぐに屋上で見た幻の意味が分かりました。

「神が清めた物を、清くないなどとあなたは言うてはならない」

との言葉によって、ペトロはイエス・キリストの十字架の贖いで、神様は新しい時代を開かれ

たことを悟ったようです。イエス様は、ユダヤ人のためだけに、罪の贖いをなされたわけではありません。イエス様は全世界のために、罪の贖いをなされたのです。だから、イエス様の福音は、異邦人にも全世界に伝えられるべきなのです。

ペトロは最早、何の疑いもなく、カイサリアに向かいました。ヤッファの6人のユダヤ人キリスト者達も同行しました。24節に、

「次の日、一行はカイサリアに到着した。  
コルネリウスは親類や親しい友人を呼び  
集めて待っていた」

とあります。コルネリウスの信仰、即ち、神様の祝福を一人でも多くの人に分かち合いたい、と言う思いが、そこには溢れていました。ペトロはそこに集まった大勢の人々に、神様の御心を語りました。28節に、

「あなたがたもご存知のとおり、ユダヤ人が外国人と交際したり、外国人を訪問したりすることは、律法で禁じられています。けれども、神は、わたしたちに、どんな人をも清くない者とか、汚れている者とか言ってはならないと、お示しになりました。それでお招きをうけたとき、すぐ来たのです」

と挨拶しています。

続いてペトロは34節で、

『神は人を分け隔てなさらず、どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。イエス・キリストこそ、すべての人の主です』

と言って、40節以降に、

『イエス様は十字架に掛けられたけれども、神様は三日目に復活させ、イエス様を生ける者と死んだ者との審判者と定められました。イエス様を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しが受けられるようになりました』

と語りました。

すると一同の上に、聖霊が降って来られました。ペトロを初め、ヤッファから一緒に着いて来た6人の者達は、異邦人の上にも聖霊が注がれたのを目の当たりにして、神様の熱心と導きによって、異邦人への救いがなされたことに、主

の御名を讃えずにはられませんでした。

ペトロは、イエス様が、ユダヤ人にも異邦人にも、全ての人の主であられる事を、はっきりと確信する事が出来ました。イエス様が全ての人の主であり、救い主であられる以上、この事を異邦人にも、全世界へ伝えていくべき事だと、確信したのでした。

私達も、自分の考え、思い込みで、福音を語り出して行く事を自分自身で制限しているのではないのでしょうか。イエス・キリストは全ての人の主、すべての人の救い主です。その信仰を持って聖霊の助けと導きを求めて、次の一人に福音を伝えることが出来るように、私達も祈り求めて行こうではありませんか。

お祈りをいたします  
憐れみ深い天の父なる神様

私達はイエス・キリストの絶大な御救いを頂きながら、人間的な思いにとらわれ、福音を語り出せないでいます。

神様が全ての人の救いを求めておられることを、深く心に受け留め、聖霊の助けと導きを常に祈り求め、次の一人に福音を伝える者とならせて下さい。

救い主イエス・キリストの  
お名前によってお祈りをいたします。

アーメン。